

第 4 回 「授業ノートは役立つ記録(1)」

1 ノートのとりかたあれこれ

「ノートをどのように取ればよいものか?」というのは大学生の多くが抱える悩みである。黒板を書き写せばわかりやすいノートになる、という授業が高校までは多かったのではないだろうか。しかし、大学で行われている授業はそういう形式のものばかりではない。板書がほとんどない講演形式の授業もあれば、スライドショーでスピーディーに進行し、ノートを取るヒマもない授業もある。様々な形式の授業でどのようにノートを取れば良いのか、どのように対応しているか、どのようなことに困っているか、どのようなワザをもっているか、などを話しあい、グループごとに発表しよう。その中には、今日の午後から使えるヒントがあるかもしれない¹。

2 現実→理想の授業などというものはこの世界に存在しない

あなたが大学を卒業するとき、4 年間を振り返って、「あれは理想の授業であった!」と思い出せる授業が一度でもあったならば、あなたは幸運である。なぜならば、理想の授業などというものはこの世界に存在しないと考えておいた方がよいからだ²。この事実を受け入れるところから、大学での学習をどうするか考えることにしよう。そのためには、大学の授業がどのような人々によって進められているのか、なぜそうなっているのか、といったしくみを理解する必要がある。そこから始めよう。

2.1 理由その 1：そもそも教員がアレ

あなたが幼稚園から高校までに出会ってきた教員は「教員免許」を持ち、「教育」を仕事とする人々であった³。この人々は「教えること」を仕事とするためのトレーニングを受けた上で、現在の仕事に就いているのである。高校までのあなたは、「教えること」を仕事とする人々から授業を受けてきたのである。

ところが大学では事情が異なる。そもそも大学教員免許というものが世の中に存在しない⁴。大学には「大学で教える方法」という科目が無いし⁵、大学における教育実習もない。

¹ この演習で学んだ内容は、実際に自分自身の大学生活に応用して試みるのが重要である。

² 印象に残る講義とか、分かりやすい講義というものはもちろんあるのだけれど、それが理想かどうかは別である。

³ 科目によっては例外もある。

⁴ 国外には「大学教員免許」という資格が存在する国もあるかもしれないが、少なくとも我が国にはそのような資格が存在しない。

⁵ 大学教育を対象とする研究はあるし、その内容を教える科目もあるが、大学教員を目指

「大学教員になるための教育」というものを受けた大学教員なんて存在しないのである。だからアレなのである。まず、この事実を理解しよう。

なぜそんな状態になっているのかというと、大学教員には第一に、研究者としての能力が求められるからである。研究者の仕事は、答えのわかっていない問題を見つけ出し、それを解く方法を示し、実際に解いてみせることである。たとえば、「クモの糸よりも細く、鋼鉄よりも強い、人工の繊維を開発する」という研究課題があったとしよう⁶。この場合、「絹を使わず人工物で繊維を合成することが必要だ」という問題を出し、そのために行わなければならない様々な化学実験方法を挙げ、実際に実験研究を行って、その人工繊維を作ってみせれば良い。医学の研究も生物学の研究も、テーマと手段は違うものの、根本的な考え方は同じである。

こうした能力は、「すでにわかっていること」を「わかりやすく教える」能力とは、別のものである⁷。大学教員の大半は、大学を卒業した後大学院に進学し、研究トレーニングを受け、しばらくしてから大学で講義を受け持つことになる。このときに自分自身が「大学でどのように教えるか」を教わっていなかったことに気づくのである。そこで自分が大学生だったときのことをムリヤリ思い出して、なんとか講義をやるのである。しかし、その記憶の中に残っている一昔前の講義だって、その担当者は同じような調子でさらに一世代前の講義を思い出してやっていたわけであり、さらにその講義だって以下略。

高校までと比べて、大学の講義が分かりにくいとか、時間配分がヘタだとか、そういう風を感じる点があったとしたら、おそらく上記のようなしくみに原因がある。従って、大学の講義に対しては、「特定分野の専門家」から、「その分野の基礎の基礎」を教わっている、という考え方で臨むことにするのが良い。そして、その内容についての「親切で分かりやすく理想的な」授業というものは期待しない方が良い⁸。

す者のためにあるわけではない。

⁶ ナイロンのことである。

⁷ 両者に関連性が無いわけではない。教育的効果の高い授業を組み立てる能力をもつ大学教員の多くは、高い研究能力をもつ。研究課題の重要性で他人を説得し、研究予算獲得レースを勝ち抜き、研究に従事するグループ構成員や共同研究者のモチベーションを高めつつ研究を進め、学術論文の査読審査をパスさせる、という、研究者としての経験を教育に応用できるからだ。「講義はアレだが専門家としての能力は高い」は珍しくないが、「専門家としての能力はアレだが教育能力は高い」は皆無である。

⁸ もちろん授業改善に取り組んでいる教員も多いので、大学の授業は一昔前と比べるとかなり良くなっている。また、分かりにくい授業やいいかげんな授業を行った教員に対して学生は、授業評価アンケートで正当な評価をすることができる。遠慮する必要はない。

2.2 理由その2：そもそも授業方法が確立していない

高校までは教員が黒板に何か書くと、生徒はそれをノートに書き写す、という「おやくそく」があった。このやり方は世界各国で何世代も前から受け継がれてきたものなので、どんなしくみになっているのかをわざわざ理解する必要がない。すべての科目がこの調子なら、大学生は「大学でのノートのとり方」に苦勞することはない。

しかし、黒板もスライドも使わず、持ち時間をフルに使って「語る」講義というものも昔から続いている⁹。これはこれで、何を記録すれば良いものかわからず、途方に暮れる学生が多い¹⁰。

一方、学問領域によってはムービーやカラーイラストを使うことによって飛躍的に理解が進む場合がある。そこで、ビジネスにおけるプレゼンテーション用に開発されたソフトウェア¹¹が大学でも使われるようになった。これは、過去約10年間のできごとである。だから、自分自身がスライドショー形式の講義を大学時代に受けたことのない教員が、スライドショー形式の講義を行っているのである。スライドショーだと一回の講義で投影できる情報量が増えるので、学生側は情報の嵐に遭遇した状態になることが多い。しかし人間の情報処理能力は昔も今も変わらない。やはり途方に暮れる学生が多い¹²。

このように、様々な形式があるということと、その中には方法が確立していない授業形式がある、ということから、大学での授業の受け方がわかりにくくなっているし、ノートを取る方法は、さらに困難になっているのだ。

3 このような状況でどのようにノートをとるのか

結論から言うと、すべての方法に適用できる理想的な対応方法というものは、ない。書店には毎年、ノートの取り方を解説した本が出ては消え出ては消え、という調子である。つまり決め手が無いのである。科目や担当教員にあわせて対策を立てるしかないのが現実である。そこで、あの手この手を考えよう。使える手は、かたっぱしから使おう。

3.1 何のためにノートをとるのか

「ノートの取り方」を考える前に、そもそも何のためにノートを取るのか、それを考えよう。ノートを取る目的としては次の3点が挙げられる。

- ・ **重要事項を忘れないため**：キーワードだけでもメモを取っておけば、あとで教科書なり辞書なりwebなりからその内容を調べ直すことができる。

⁹ いわゆる文系の科目にときどきみられる。

¹⁰ 今に始まったことではない。

¹¹ たとえばパワーポイント。

¹² そして教員はこのような理由で途方に暮れたことがないので、毎年同じ過ちを繰り返す。

- ・ その授業で扱われた内容を復習できる資料にするため：試験勉強とかレポート制作のときとかに、よくまとまった記録が欲しくなる。
- ・ 記憶するため：書いて覚える。手を動かす。身体で覚える。小学生の漢字書き取りと同じ。

あなたはノートに何かを書くとき、これらのなかのどれを目的にしているだろうか。そこを最初にはっきりさせよう。これは、科目によっても変わってくるだろう。

3.2 ノートの使い方

この3つの目的を1冊のノートで済ませる方法も考えられるし、それぞれに合わせて別のノートを用意する方法も考えられる。いくつかの方法を考えてみよう。重要なのは、講義時間内に伝えられる知識を何らかの方法で記録し、それを自分自身に役立てるための情報源として整理し、さらにその内容を記憶し、今後の人生に活用して行く流れを意識することである。その流れの中にノートを位置づけるのである。

知識→記録→情報整理→記憶→活用

3.2.1 一冊で済ませる方法

講義内容を記録し、同じノートに後から追記できるようにスペースを残しておくといい。スペースが残っていれば、あとから教科書や参考書を見て自分で調べた内容を加えることができる。これが、あなたにとっての役立つ記録になる。

見開き左側に講義中の記録、右側にあとからの追加、というやりかたでも良いし、全ページの左側なり右側なりに3cmなり5cmなりのスペースを空けておいて、あとから追記する方法も良いだろう。書いて覚える、というプロセスが必要でない場合にはこれが良いかもしれない。記録から記憶へのつながりが残るノートである。

復習するときに書き加える 気づいたこと、ヒント、追加情報	講義を聞きながら記録する
復習するときに書き加える 重要ポイント&まとめ	

図 後から書き加えることを前提としたノートのレイアウト

3.2.2 用途を分離する方法

講義時間内は話を聞くことにエネルギーを割り当てたい。そこで、カードでもいいし、メモ帳でもいいし、チラシのウラでもいいので、黒板の内容とか、話のなかで気になったキーワードとかを記録しておく。すなわち、記録としての講義ノートである。

講義が終わったら、その記録をもとにまとめノートをつくる。ここには黑板に出てこなかった内容とか、自分で調べた関連情報とかを追加して行くこともできる。きれいなノートを取ることが好きな者は、この段階で見た目にこだわればよい。整理された情報源としてのノートができあがる。そしてこれなら「書いて覚える」も兼ねるので一石二丁である。

3.3 他の手段

ノートを取ることだけが講義の記録ではない。様々な道具が記録に応用できる。いくつか例を挙げてみよう。

- ・ **ボイスレコーダー**：話の内容を丸ごと記録することができる。一昔前¹³から外国語対策に利用されているが、他の科目にも応用可能。あとからノートに書き写してもよい。倍速再生機能が付いていれば、90分の講義を45分で復習可能。
- ・ **カメラ**：黑板やスライドを撮影してしまうという手もある。そのままプリントアウトしてノートに貼り付けてもよい。携帯電話のカメラ機能も活用できる。実験科目の記録にも応用できる。撮影前には念のために講義担当者の許可を得ておこう。¹⁴
- ・ **ビデオ**：器具を用いたデモンストレーションが行われるような授業に便利。携帯電話の動画機能も使える。撮影前には念のために講義担当者の許可を得ておこう。¹⁴

新しい技術や製品が登場すれば、「知識→記録→情報整理→記憶→活用」の流れに、それが応用できないか考えてみよう。

【注意】医療系学部の専門科目においては、講義、実習、実験科目における撮影 and/or 録音を禁止している。講義時間内に限定して使用することを前提に、患者の協力により得られた写真や肉声が、医療系科目の教材として用いられている場合があり、患者のプライバシーを確実に保護するために、撮影 and/or 録音を禁止している。

3.4 ノートは捨てない

ノートは自分自身の体験と結びついた、二度と手にいれることのできない貴重な財産である。テストが終わった後も保存しておこう。何かの拍子に見返したくなることがある。そのときに、以前の様々な記憶がよみがえり、新しい理解が得られたり、そのときに役立つ予想外のヒントが思いついたりすることもある。物理的に保存するスペースを節約するのであれば、**スキャンする**¹⁵ことがおすすめである。

¹³ 一般向け「テープレコーダー」が販売された頃から使われている方法。約半世紀の歴史がある。

¹⁴ なお、著作権の問題が生じる場合があるので、撮影した画像をインターネットで無制限公開、というのはダメ。

¹⁵ スキャナとプリンタが一台にまとまった家庭用の複合機が、実売価格で1万円を切る時代になった。勉強に限らずアレコレ役に立つので、購入をおすすめする。大量の紙を抱え

4 模擬授業その1：ノートを取る例

以上を踏まえて、ノートを取る方法を考えてみよう。今回はスタンダードな「黒板を使った講義」を10分間やってみる。その内容をノートにとり、工夫を加えてみよう。今回の模擬授業のテーマは「長さをはかる」である。

5 参考情報

梅棹 忠夫：『知的生産の技術』，（岩波新書，1969）

鎌田 浩毅：『一生モノの勉強法』，（東洋経済新報社，2009）

外山 滋比古：『思考の整理学』，（ちくま文庫，1986）

外山 滋比古：『知的創造のヒント』，（ちくま文庫，2008）

6 次回までの課題

今回学んだ内容を実際にあなたが履修している科目のノート取りに応用してみよう。これから1週間の間に取るどれか1コマぶんのノートを選び、持ってくる。次回はグループ内でノートを見せ合い、それぞれのグループから1例を選んで発表してもらおう。コピーでもよい。

以上

込んでいても、その中から必要な情報をほじくり出すのは難しいし、土地価格の高い我が国で紙資料の保管のために家賃を払うのは無駄である。